

世羅町立世羅中学校

(1) 学校の概要

広島県中東部に位置し、生徒数203名、教職員数24名の学校である。平成27年から3年間、県教育委員会の「『学びの変革』パイロット校事業」のパイロット校として、身に付けさせたい資質・能力「主体性」「自らへの自信」「思考力・表現力」を設定し、その育成に向けて単元開発を行っている。

(2) 教育活動

世羅中学校は、学校教育目標「夢と志を持ち、豊かな感性と創造性に満ちた、活力ある生徒の育成」の実現に向けて取り組んでいる。

ア 「身に付けさせたい資質・能力」設定時の工夫

「学びの変革」パイロット校として「身に付けさせたい資質・能力」を設定する際、次に示す二つの工夫を行っている。

一つ目は、平成24年度から3年間、「学力向上総合対策事業（タイプⅠ：小中連携）」の地域指定校としての研究を踏まえて設定したことである。このことにより、「学びの変革」を「新規の取組」ではなく、これまでの取組を継続・発展させたものにすることができている。

二つ目は全教員で考えを出し合い協議して設定したことである。このことにより、設定した資質・能力が教員の「合い言葉」になるほどの共通認識を得ることができている。

イ 「学力向上のポイント3」の設定

資質・能力を育成するために、図1に示す教育研究計画を設定している。

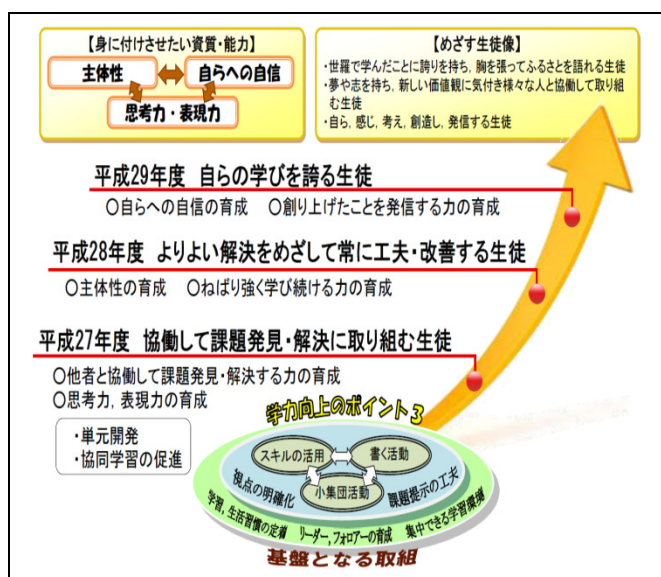


図1 「教育研究計画」

「学力向上のポイント3（以下、「ポイント3」とする。）」は、授業づくりの視点である。毎月実施している校内研究授業の事後協議では「ポイント3」を視点とした協議が行われている。中学校では一般的に他教科の授業には口出ししにくいといった「教科の壁」が存在するが、世羅中学校では、授業後の協議会において他教科の教員が遠慮なしにコメントする姿が見られる。「ポイント3」があることで、授業研究の「C（評価）」が活性化され、授業改善が促されている様子が窺える。

ウ 指導の統一のための工夫

指導の効果を上げるためには、指導の統一を行う必要がある。世羅中学校では、身に付けさせたい資質・能力やめざす生徒像に迫るためのベースとして前掲の図1に示す「基盤となる取組」を設定している。このうち、「集中できる学習環境」とは、掲示物を教室後方に掲示したり、教室の床に印を付けて座席の列を揃えやすくしたりするなどの環境整備に関することである。外部の専門家を招聘し、教室の環境整備等について1クラスずつ指導・助言を受け、生徒が学習に集中できる環境を整えている。また、「学習、生活習慣の定着」のために、全教員が全授業で共通に指導すべきことを次のように整理している。生徒の行動に関わる部分は生徒にも配付し説明している。

■教師側の姿勢

- ・服装・教室内の環境（始業時、整えさせる。前の掲示物は必要な時期に必要なもののみとする。）
- ・視点の明確化（生徒が聴く、見る、書く、のどれをすればよいかをはっきりさせる。）
- ・書く活動の充実（書く時間を保障する。）

■生徒側の姿勢

- ・わからないことや意見を積極的に発言する。
- ・どんな考えも大切に、尊重する。
- ・3ポイント発言（つなぐ、結論、理由）を意識して発言する。

「学習規律の確立について」（抜粋）

これらは、各教員がそれぞれに行っていた実践を統一し、組織的な取組にするための工夫である。このような組織的な指導が教員及び生徒に浸透することで、「エ．学校文化」にも良い影響を与えることが期待できる。

エ 実態把握のためのアンケートの実施

世羅町ではR P D Cサイクルを用いた授業研究を行っており、世羅中学校の授業研究においても調査による実態把握を重視している。生徒を対象に

「学びと集団にかかわる意識調査」を年3回実施している。調査項目の一部を表1に示す。なお、各調査項目は4段階で評価している。このアンケートを分析することで、学校で設定した資質・能力等の育成状況を把握し、指導の改善に生かしている。

表1 「学びと集団にかかわる意識調査」（抜粋）

分類	内容
課題設定	授業では、解決しようとする課題について、「なぜだろう」、「やってみたい」と思います。
整理・分析	授業では、情報を、比べたり（比較）、仲間分けしたり（分類）、関係を見つけた（関係付け）して、何が分かるのかを考えています。
振り返り	学習の振り返りをするときには、「どこまで分かったか」、「学習の方法でうまくいったことや失敗したことなどの理由」を考えています。
協働学習	グループ活動の時、司会者としてみんなに指示を出し、活動を進めることができます。
ねばり強さ	分からないことは、そのままにせず分かるまで努力しています。
主体性	学校で習ったことや気になったこと、関連があることを、学習が終わっても更に深く調べたり、学んだりします。

さらに今年度から、各教員の授業の評価を充実させるために、生徒に対して「授業評価アンケート」を実施している。アンケート結果は、全体の平均値だけでなく教員一人一人の授業について分析している。現状を調査によって把握して授業研究を行うことで、取組がより効果的なものとなっている。

(2) 経営活動

ア 「単元開発グループ」の組織

「学びの変革」パイロット校として、各教科及び総合的な学習の時間における課題発見・解決学習の単元開発を行うために、全教員で開発グループ（1グループ当たり3～4名）を組織している。教科混合で、年齢構成も考慮している。「他教科の教員が分からない授業は生徒たちも分からない」という考えのもと、授業改善に向けて議論する姿が見られる。その教科の専門ではないからこそ生徒目線で改善点を発見できるという発想の逆転による組織構造を作り出している。

イ 「子供中心主義」による授業研究

世羅中学校の教員は、1人が年2回以上の研究授業を行ったり、放課後自主的に集まって「シミュレーション授業（模擬授業）」を行い協議したりす

るなど、授業研究に対して非常に前向きに取り組んでいる。これは、「目の前の子供を伸ばす」という教員の「子供中心主義」が組織文化として根付いているためである。「子供中心主義」は、学力的に課題の多い学年に対して基礎的・基本的な知識を定着させるため、いわゆる知識注入型の授業を行った結果、生徒が逆に学びから離れていってしまったという過去の苦い経験から来ている。「どうやったらあの生徒たちが学びに向かう授業を行うことができるか。」が全教員の共通課題となっている。これは、今年度の研究仮説「知的好奇心をゆさぶる学習テーマを設定し、考え方や伝え方を習得させ、学びを深める協働学習を取り入れれば、生徒は主体的に課題を発見・追求していくようになるであろう。」にも表れており、生徒が興味をもって学習に入ることができる導入の工夫をはじめ、生徒が主体的に学習に取り組む授業を追究している。

研究だよりには、次のような個々の子供の姿を大切にした授業研究を行っている姿が見て取れる。

シミュレーション授業では、スムーズに流れなかった授業展開が、目の前の子どもにどんな力をつけるのか、そのためにどのような発問をし、手立てを講じ、準備をするのか、この発問のときに「A君はどんな反応をするだろう…。」、「Bさんは学習についてこれるかな…。」、「C君の思考を深めるために小集団活動を仕組むと効果があるだろうか…」など一人一人の生徒にしっかりと目を向けていくと、授業が瞬く間に変わっていきました。

研究だよりの記述（抜粋）

授業研究の充実のために、様々な工夫を取り入れているが、それらを機能させるためには、子供観と指導観を教員が共有することが重要であることが分かる。

ウ 授業研究を活性化させるミドルリーダーの存在

パイロット教員が単元開発や授業研究の中心となり「学びの変革」を推進している。

課題発見・解決学習の単元開発の視点を提示するだけでなく、モデル授業を行い、他の先生方にモデルとなる授業のイメージを示している。他の教員はそれを見ることで自分の授業とのギャップに自ら気付くことができるようになった。校内研修での協議内容や日々の授業参観での気付きなどを、その場限りで終わらせずカリキュラム改善につなげるために、前述のような研修だよりを配付するようにもしている。